2025年11月

民際協力ニュース

パルシック ニュース VOL.47

パルシック PARC Inter-peoples' Cooperation

絶望の中で、それでも生きるガザの人びとと共に

２０２３年10月７日の戦闘開始から２年にわたる激しい攻撃により、ガザはまさに「地上の地獄」と化しました。２０２５年10月に停戦が成立したものの、イスラエル軍による徹底的な攻撃は、あらゆるインフラを破壊しました。住まいや仕事、地域のコミュニティといった生活の基盤も破壊され、多くの命とともに、ガザの人びとは未来を描く希望までも奪われています。

２０２５年８月、国際的な食料危機の指標「総合的食料安全保障段階分類（ＩＰＣ）」は、ガザ市で飢饉が起きていると発表しました。停戦後も壊滅的な食料危機は続いています。この危機に対応すべく、パルシックは現地パートナーと協力し、緊急支援を続けています。８月には、飲料水をのべ約１万８０００人に届けました。９月上旬以降は、イスラエル軍のガザ市への大規模攻撃と地上侵攻を受けて中部地区に避難した１５０世帯へ、約１週間分の食料を提供しました。さらに、視覚障がいや腎臓病などの慢性疾患を抱える人びとを含む、支援が届きにくい１６６３世帯に食料バスケットを配付し、ガザ域内で持続的に食料生産ができるよう畜産農家の支援も継続しています。

９月の激しい攻撃で、パルシックの職員も避難を余儀なくされました。停戦後に戻った自宅は無残に破壊され、かつての暮らしの面影はほとんど残っていませんでした。彼は語ります。

「２０２３年10月以降、ガザの人びとは絶え間ない爆撃と破壊、そして飢餓の中で、これまでに10回以上も避難を強いられました。退避とは、単に移動することではなく、美しかった記憶やかつての夢も奪われることです。世界中のみなさんに、私たちガザの住民の声を聞いてもらい、言葉では表せない痛みを感じ、住民たちが単なるニュース上の数字ではないことを理解してほしいです。どうかガザのことを忘れないでください」

停戦が恒久的なものとなっても、それが終わりではありません。パルシックは、ガザの人びとが再び暮らしを取り戻し、尊厳と平和のもとで生きられる日まで、共に歩み続けます。

（この事業は、ジャパン・プラットフォーム、日本ＮＧＯ連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

2025年９月に実施した食料バスケット配付の様子

２０２５年10月、飼料の確保が難しいなかでも羊農家は貴重な収入源となる羊の飼育と繁殖を続けている

大量の瓦礫で埋め尽くされているガザ

目次

ガザ　絶望の中で、それでも生きるガザの人びとと共に…… 1
ミャンマー　紛争下で紡ぐ希望、ミャンマー少数民族地域での縫製研修／タイ国境地域、子どもたちが学び続けるために…… 2
レバノン　アルサール、子どもたちとシリアの未来／シリアの地で、再びまく希望の種…… 3
東ティモール　グループ間交流を通じた花卉栽培の学び合い／**能登**　子どもも大人もホッとできる食堂…… 4
みんかふぇ　小さな挑戦を積み重ねて／**マレーシア**　10年目のマレーシアフィールドワーク…… 5
フェアトレード　美味しいと大好評のデーツがパレスチナ西岸から再入荷！／フェアトレード 日々のこと…… 6／東ティモールから産地の様子とASEAN加盟／日本から東ティモール、８人のマウンレテ集落へ／ちょっと寄り道♪フェアトレードな人びと…… 7
パルシックからのお知らせ　パレスチナサポーターキャンペーン　200名達成！／グローバルフェスタJAPAN2025に出店しました！／東京事務所移転のお知らせ／寄付募集…… 8

紛争下で紡ぐ希望、ミャンマー少数民族地域での縫製研修

男の子たちがサッカーで遊ぶ傍らで、ペダルを踏みカタカタとミシンを走らせる女性たち。一年前、彼女たちは針と糸すら持ったことがありませんでした。しかし今では立派な仕立て屋となっています。10代から20代半ばの彼女たちは、2021年の軍事クーデターで学校が休校となり、学業を継続できませんでした。家族もまた、家や職、農地を失い、生活が厳しくなりました。戦闘により地雷が埋められ、仕事を求めて遠出することは危険となり、さらには突然の戦闘に巻き込まれる人もいました。そうしたなかでパルシックは、女性たちが生計を立てられるように縫製研修を始めました。

研修の準備は困難を極めました。研修生30人分のミシンを揃えられる店は無く、全員分を購入するまでに数か月かかりました。そのうえ、数十か所もある検問所でミシンを没収されないよう慎重に輸送しなければならず、途中では戦闘による通行止めにも遭いました。こうして事業開始から半年以上が経過してようやくミシンを活動地に届けられました。

ミシンの質は良くなく、修理不可能な数台以外を、修理を重ねながら使用しています。戦闘により縫製研修所を移転したこともありました。安全な場所を求めて避難した2人を除く28人が最終的に研修を修了し、洋服、カバン、リュックなど、さまざまなものを作れるようになりました。

当初、研修の目的は、女性たちが収入を得られるようにすることでした。実際、少なくとも8人は月に15~30万チャット（約6千~2万円）を稼いでいます。しかし残りの20人は、ほぼ無償で地域住民のために洋服を作っています。「将来のことは考えられないけど、今はここで地域のために貢献したい」。母親を実家に残し、泊まり込みで研修を受けていた10代の女性は、笑顔でそう語りました。

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

上：裁縫研修の様子　右：研修生が仕立てた洋服

タイ国境地域、子どもたちが学び続けるために

2025年4月からタイ国境のミャンマー移民の子どもたちが学ぶ移民学習センター（MLC）8校の支援を開始しました。4月から5月にかけて校舎や寮の建設など、生徒が増え続ける中で不足していた施設の増築や改修をほぼ完了し、6月の新学期開始に間に合わせることができました。また、机やホワイトボード、2段ベッドなどの備品も順次納品し、学習・生活環境を少しずつ整備しています。給食用の食料支援では、各MLCからの希望を聞いて必要とされているものを毎月届けています。

軍の空爆が続き、ミャンマーからタイへ逃れてくる人びとの数は増え続けています。教室や机、椅子など、学習に必要な設備はすでに現状の生徒数でいっぱいの状態ですが、戦闘を逃れてきた子どもたちが新たにMLCへの入学を希望しています。すべてのMLCが新しい生徒を受け入れられるわけではありませんが、学ぶ場を失ってしまう子どもたちのことを思い、十分なスペースや快適さが確保できない中でも、できる限り受け入れています。

困難な状況でも、子どもたちはエネルギーにあふれ、友人たちと学校生活を送り、先生たちも厳しい待遇や十分でない教育環境の中でも、創意工夫しながら子どもたちによりよい教育・生活をと尽力しています。

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

この教室では、4つの学年が授業を受けている

人びとの声

MLCで学ぶSくん

インタビューに応じてくれたSくん

10年前から家族と離れてタク県北部のMLCの寮で生活しているSくんは、現在10年生の17歳。「家族は、カレン州の中でも特に戦闘の激しい地域にいるはずですが、治安の悪化と経済的な理由で、もう5年間会えていません。でもここ（MLC）には友だちがいて、生活も気に入っています。勉強は特に英語が好きです。将来は看護師になって、故郷の村で働きたいです」と話してくれました。

アルサール、子どもたちとシリアの未来

レバノン北東部のアルサール地方では、変化に富む一年が終わりました。2024年12月のアサド政権崩壊以降、国内外に避難していたシリア人は故郷へと帰還しています。アルサールでも、2025年のはじめにシリア難民の半数近くがシリアに戻り、多くの家族が暮らしていた難民キャンプの大半が引き払われ、市の様子もガラリと変わりました。アルサールで活動していたNGOの多くが活動拠点をシリアへ移す中、パルシックはアルサールに残っている子どもたちに継続して授業を行ってきました。子どもたちの意欲と先生たちの献身的な努力のおかげで、今年度も多くの子どもたちが無事に修了し、アルイマン校に通っていた子どもたちとその家族の多くはシリアへ戻りました。その状況を受け、パルシックはレバノンでのシリア難民教育支援を終了しました。

アルイマン校の子どもたち

毎年のサマースクールでは、アルサールで有名なあんずの木を、シリア難民の子どもたちとレバノン人の子どもたちみんなで植えました。この木々が、シリアの圧政からの解放とこれからの復興再建の象徴となり、そしてこの先、子どもたちがレバノンやシリアといった国の枠組みを超えて、一人ひとりが同じ人間として尊重しあい、尊厳をもって生きていく未来への証となることを願っています。

（土橋弘）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

帰還先のシリアから。
イスラア先生（元アルイマン校教師）

イスラア先生

「シリアに戻った子どもたちの多くは公立学校で学びを続けていますが、学校の多くは修繕を必要とし、1クラス60人という過密なところもあります。ほとんどの子どもたちは教科書もなく、また家計を支えるために学校を離れる子もいます」。アサド政権崩壊と暫定政権発足からまもなく1年。シリア再建への道のりは長く、シリアでも子どもたちの学びを守る取り組みが必要とされています。

シリアの地で、再びまく希望の種

シリアでは長かった暑い夏が終わり、市場には栗やオリーブなどが出回っています。ハマー県の村で農業をしている人びとの多くは、アサド政権崩壊後に避難先から故郷へ戻ってきた農家です。帰還先の故郷は、家屋や農地が破壊されており、生業の農業を再開するのは簡単ではありませんでした。2024年11月に開始した農業支援の活動は、経済的な厳しさと生活再建の難しさに加え、記録的な干ばつと猛暑に見舞われた一年となりました。

活動地域では、冬小麦と夏野菜を栽培し、地元の人びとの日々の食生活を支えています。活動に参加している人びとは、収穫した作物を元手に安定した生活を取り戻しつつあります。収穫した農作物を売って得た収入により、多くの農家が借金を返済し、必要な薬を購入し、子どもたちを再び学校に通わせることができるようになりました。さらに、今シーズン得た収入と知識を活かして次の作付けに臨むことで、より安定した生活を送ることが期待されています。

スイカは夏の甘いご褒美

気候や経済の状況が大きく変化する中で、人びとは必死に生活を立て直そうとしています。私たちは、引き続き農業や小規模ビジネス起業支援を通じて、人びとが自らの手で暮らしを切り開いていくことができるように活動していきます。

（アンソニー／茅野）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

乳業を再開したムハンマドさん

私はいまヨーグルトやチーズを作り販売して生計を立てています。内戦下、私は北部に避難していましたが、生活は厳しいものでした。しかし故郷に戻り、パルシックの小規模ビジネス起業支援を受け、これまでやってきた乳業を再開できました。自分たちで稼ぎ、自分たちの家で暮らすことができ、経済的にも精神的にも以前よりも楽になっています。まだ貯蓄ができるレベルではありませんが、少しずつ事業を拡大して自分の店を持ち、販売量を増やしていきたいです。

ヤギに餌をあげるムハンマドさん

グループ間交流を通じた花卉栽培の学び合い

2023年3月から開始した「女性の生計向上を通じた子どもの栄養改善事業」は、残すところあと数か月となりました。花卉栽培に適した高地で、コーヒー産地でもあるアイレウ県、アイナロ県マウベシ、エルメラ県で実施する本事業では、参加する女性同士の交流を通じた学び合いを推奨しており、今年の8月から9月にかけて、各グループが各県を訪問する機会を設けました。

風に強い雨除け設備の取り付けやミミズ堆肥づくり、キクの自家採穂による育苗、販売ルートの確保、お客さんに喜んでもらう工夫など、各地・各グループで工夫をしていることから学んだり、逆に、できていないことは自分たちが実践していることを伝えて共有したり、お互いに学びとなる交流ができました。

また、今年から花卉栽培を開始したメンバーは、東ティモールで一番花が売れる11月初旬の「お盆」の時期に向けて、開花調整を開始しました。天候による日照の違いや、電照栽培時の電気の調整次第で、出荷の頃合いは多少前後しますが、どこもおおむね10月末に収穫の目途が立ち、ほっとしています。雨季前で日差しが強く、日中の気温が上がる時期で、病虫害が発生しやすい時期でもあるため、対策を行いながら無事に開花を迎えられるよう、これからも気は抜けません。

（林知美）

よく手入れされたマウベシ郡のアデリーナさんの畑

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

交流会に参加したジャシンタさん
（アイレウ県ライレテグループ）

エルメラ県のラウアラグループを訪問して、私たちと同じく花が好きな人たちが花卉栽培をしていることを知り、とても嬉しくなりました。首都のディリから近いということもあると思いますが、視察中にもディリから花を買いに来る人がいました。SNSでうまく発信していたり、買いに来てくれた方へ商品にならないマリーゴールド、野生菊などをおまけにつけたりしてお客さんを満足させる工夫をしており、私たちもまだやらなければならないことがたくさんあると感じました。

交流を深めた2グループの女性たち

能登　子どもも大人もホッとできる食堂

2025年2月から、能登町で地域を越えて人が集える居場所づくりを始めて8か月。被災して営業を停止している能登七見健康福祉の郷「なごみ」の使える部分を町からお借りして、カフェや運動スペースを設け交流イベントなどを開いています。活動を始めた頃は、慣れないカフェの運営にオペレーションを見直す日々でしたが、最近は常連客も増え、スムーズに営業できる日が増えてきました。

その「なごみ」で月1回子ども食堂を開催しています。回を重ねるごとに参加者が増え、今では100人を超える方が来ます。子どもはいつもと違う空間で友だちと食事をするのが楽しいようで、賑やかな子どもたちの声に場がなごみます。近所に住むおばあちゃんたちも「子どもじゃないけれど、ご飯も美味しいし、いつも楽しみにしている」と嬉しそうに話してくれました。毎回、地元のボランティアの方に手伝ってもらいながら運営していますが、100人分の調理と片付けは大変。それでも、みんなの笑顔を見ると、被災して不自由な状況が続く今の能登にはこうやって食事を一緒に楽しめる場が必要だと強く感じ、次回のメニューは何にしようかと、スタッフみんなでアイディアを出しあっています。

（小栗清香）

子ども食堂の様子。親御さんが夕食の心配をせず親同士で話せる時間が息抜きになっている

（この事業は、ジャパン・プラットフォーム、ALAMCO SRI社会貢献ファンド（愛称：あすのはね）の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

なごみの常運で草刈りボランティアの前田さん

この日も楽しそうに話をしてくれた

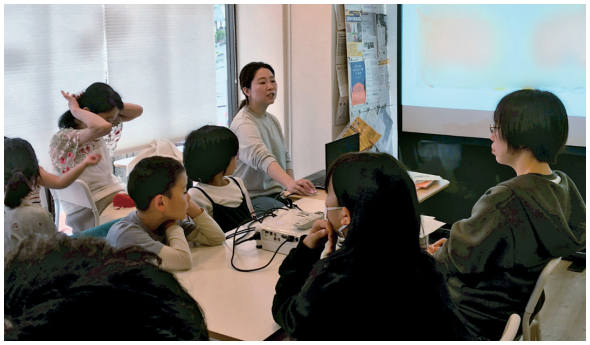
定年退職後、地元の福祉法人で送迎バスの運転手として10年ほど勤務していました。自分がよく訪れる場所が、手入れが行き届かなくて荒れてしまったら嫌だなと思い、なごみの周りの草刈りをしています。地震の前はなごみの温泉と食堂を利用していました。今は、毎週木曜日に開催されている100歳体操やいろんなイベントに参加しています。地震の影響で、人が集まりにくくなってしまい寂しいですが、なごみに来るといろんな人に会えるので楽しいです。

小さな挑戦を積み重ねて

東京都葛飾区のコミュニティカフェ「みんかふぇ」は、カフェ、子ども食堂、フードパントリーの運営に加えて、地域の方々が「やってみたいこと」を形にできる場としても活用されています。例えば「ちいき食堂しま」さんは、地域の交流の場として、みんかふぇ子ども食堂とはまた一味違う、温かい空間を作ってくれます。みんかふぇの常連さんも、しまさんの繋がりで初めて訪問された方も、幅広い世代の人たちが笑顔で言葉を交わし合う、まるで親戚の家でご飯を食べているような、そんな雰囲気です。

他にも、ボランティア講師によるフラワーアレンジメント教室や性教育講座などが好評です。平日のカフェ営業中には、編み物や推し活グッズ作りを楽しみに集まるグループや、世間で話題になっていることをゆるく楽しくおしゃべりするグループもあります。また、「ボランティアをやってみたい」という小学生がやって来たことをきっかけに、子どもの権利やボランティアの意義について改めて対話する機会も増えました。

ほぼ毎月開催しているフラワーアレンジメント教室


親子が集まる助産師ボランティアによる性教育講座

こうした活動の多くは、地域の皆さんからの「やってみたい」という声から始まります。試行錯誤の末に、力及ばず実現できないこともありますが、挑戦できる場としてみんかふぇを選んでもらえていることを、とてもありがたく感じています。これからも、誰もが集い、誰もが参加できる居場所づくりを実現していくために、新たな挑戦の伴走者として、できることを一つずつ積み重ねていきます。

（吉浦諒子）

（この事業は、中央共同募金会からの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

10年目のマレーシアフィールドワーク

マレーシアで多文化共生を学ぶフィールドワークを始めてから、10年になります。今年は2校の大学から学生を受け入れました。マレーシア社会の多様性は、学生の多様な関心を受けとめてくれます。学生はそれぞれの視点で関心分野への理解を深めていきました。1校の大学では、ペナンに加えてクアラルンプールでの街歩きを行い、ミャンマーからの難民が多く暮らす街区と、移民の子どもたちが通う学習施設を訪ねました。移民の多くはマレーシア国内で「資格外」の存在であり、難民条約を批准していないマレーシアでは自由のない「かごの中の鳥」のような状態から抜け出す手立てがありません(注)。そうした厳しい状況で暮らす人びとですが、「日本の学生の訪問はそれでも希望を与えてくれる」と現地コーディネータのデニスさんは言います。今回はソマリア移民のお宅を訪問し、一緒に民族料理を作ってごちそうになりました。大変な生活の中でも「ほんのひとときでも楽しい時間を過ごせた」と、受け入れ家族は話してくれたそうです。

今後もフィールドワークでは、学生がマレーシアでしか得られない経験を通じて学び、自らの将来を考えるだけではなく、出会う人びとの人生にも何か貢献できるような内容を模索していきたいと考えています。

（大塚照代）

（注）マレーシアは難民条約に批准していないため、ミャンマーやソマリアなどの紛争地から逃れてきた人びとは「難民」としての法的地位を持たず、「不法移民」として扱われます。そのため、公的なサービスへのアクセスができず、正規の就業や就学の機会が与えられていません。

移民の子どもたちに折り紙を教える日本の大学生

人びとの声

クアラルンプールで移民の人びとを支援するデニスさん

移民や難民という難しく重いテーマであったにもかかわらず、参加した学生たちは関心を持って話を聞き、理解しようと努めていました。スマートフォンやAIに依存する現代社会にあって、背景や文化の異なる人びとが出会い交流する機会を持つことは、平和なグローバル社会を築いていくうえで、とても意義のあることです。2日間という短い時間でしたが「紛争地から逃れてきた人びとの状況をドキュメンタリー映画にして多くの人びとに伝えたい」という声や、「ソマリア出身の家族が作ってくれた食事はとても美味しかったが、その家族が抱える経済的な課題やマレーシアで直面する困難を考えると、複雑な思いになった」という感想が聞かれ、十分にインパクトのある活動だったと実感しています。

パルシックの フェアトレード

パルシックのミッション「人と人が助け合い、支え合い、人間的で対等な関係を築く」という考えをもとに、フェアトレード事業では、商品の生産や流通、消費が市場の価値だけに依存するのではなく「人間的な交流と信用に基づくフェアな取引」を大切にしています。

オンラインショップ パルマルシェ
ParMarche
https://parmarche.com

パレスチナ産マジョール・デーツ
オンラインショップ ParMarche ＞
お菓子・食品

オンラインショップ
パルマルシェ

パレスチナ
応援ステッカー
440円（税込）

from Palestine 美味しいと大好評のデーツが パレスチナ西岸から再入荷！

2025年2月に初輸入したパレスチナ産マジョール・デーツは、おかげさまで3か月という短い期間での完売となりました。パレスチナで起こっている事に想いを馳せてくださった方、デーツというドライフルーツに興味を持ってくださった方がこんなにもいるという手ごたえを感じ、今年の冬もぜひ輸入したいと準備を進めてきました。

デーツを日本市場で探してみると、その多くは中東諸国から輸入されています。品種もさまざまあるなかで、パレスチナ産マジョール・デーツは、皮の薄さ、ジューシーさが特長で、食べ応えもあります。

5粒入り
648円（税込）

250g入り
1,296円（税込）

今年3月には、ヨルダン川西岸地区を舞台にした『ノー・アザー・ランド 故郷は他にない』が、アカデミー長編ドキュメンタリー映画賞を受賞しました。映画では、家族団らんの場でデーツを食べるシーンがあり、パレスチナの人たちにとってデーツは日々の癒しに欠かせない食べ物だというのが伝わってきます。マジョール・デーツを食べる時には、ぜひパレスチナの人びとの暮らしを想像してみてください。

夏頃から包材を準備しはじめ、あっという間に9月の収穫期が始まり、輸入の時期になりました。今年は箱入り250ｇに加え、お試しサイズの5粒入りも登場しました。それに合わせて、パレスチナを応援するオリジナルステッカーを制作しました。イラストは、絵描きの舘林愛さんが、パルシックのパレスチナ事業をイメージして描いています。プレゼントにもおすすめですので、友人と、家族と、みなさんでぜひお楽しみください。（嘉村早希子）

フェアトレード 日々のこと

SariConnection製品の入荷と スリランカ北部のいまをインタビュー

2025年9月、スリランカ北部からSariConnectionのエコバッグと巾着が届きました。伝統衣装のサリーをリサイクルした色とりどりの製品はどれも魅力的な一点ものです。2012年にサリー・リサイクル・プロジェクトを開始してから13年。今年の縫製にはスリランカの最北端近く、ジャフナ半島のトゥンプライ村から4名の女性が参加し、2か月間にわたって朝夕の限られた時間を活用しながら、作業を重ねてくれました。

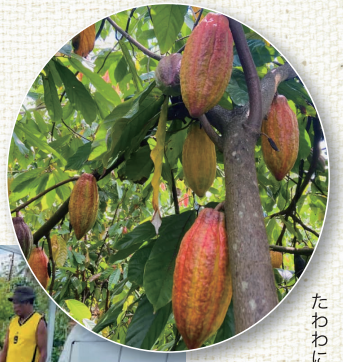
SariConnection製品の縫製を取りまとめる元ジャフナ事務所スタッフのアジットさんによると、北部州では物価上昇、若年層の流出、ドラッグ流通などの課題が続いているといいます。一方で2024年の大統領選で選出されたディサナヤカ大統領は、持続可能な国家を目指して、汚職のない政治「クリーン スリランカ」を掲げて、北部の市民からも期待が寄せられているとアジットさんは話してくれました。

これからも情報発信や製品の販売を通じて、スリランカ北部の人びととつながり続ける機会を提供していきます。（竹内玄）

到着したサリーエコバッグ。ブランドの札の裏には、縫製した方の名前が書かれています

from Timor Leste

東ティモールから産地の様子とASEAN加盟



たわわに実った東ティモールのカカオ

カフェ・ティモールの故郷、東ティモールは、この10月にASEAN正式加盟を果たしました。制度的にも外交能力の面からも未熟で、東南アジアの中でも特に貧しいこの国がASEANに加わることの意義は、加盟を熱望していた東ティモール側というよりもむしろ、多様な価値観を持つ加盟国を包摂する地域機構として国際社会での発言力を強めたいASEANの側にあるのかもしれません。

ASEAN加盟に向けてここ数年、東ティモールは様々な課題に急ピッチで取り組んできました。経済の多角化もそのひとつです。コーヒーは長らく東ティモールの唯一の輸出農作物で、独立から20数年の間に高品質なコーヒーとして国際社会に認知されるまでになりました。品質に厳しく参入が難しいといわれる日本の市場でカフェ・ティモールがみなさんに愛されてきたことは、東ティモールのコーヒー産業で大きな励みとなってきました。この経験を次はカカオに活かしていきたいと思っています。東ティモールの南海岸にあるナタルボラ農業技術学校のみなさんと品質の良いカカオ豆の試作に勤しんでいます。今後の展開にどうぞご期待ください！　（東ティモール事務所　伊藤淳子）

ナタルボラ農業技術学校でのカカオ豆加工風景

from Japan

日本から東ティモール、８人のマウンレテ集落へ

to Timor Leste

収穫前には古いコーヒーの木の下でお祈りをします

今年訪れたのは、マウベシ郡はエディ山のすそ野にあるマウンレテ集落。ジョアオンさん一家がツアー一行を温かく迎え入れてくれました。コカマウ組合へ2021年に新しく加入したマウンレテ集落は、2024年10月に終了したコーヒー畑改善事業にも参加して、コーヒーの木の手入れを行ってきた集落です。古くから根付くモクマオウの森の中のコーヒー畑を見学し、台切りをして若返ったコーヒーの木と、枝の先で赤くつやつや光る大きな完熟した実にふれ、集落の生産者のみなさんと取り組みの成果や収穫の喜びを分かち合うことができました。（竹内玄）

歌いながらかわるがわるハンドルを回して、摘んだコーヒーの実から果肉を取りはずしました

ちょっと寄り道♪ フェアトレードな人びと

海の潮風が届く、緩やかな坂道に面した住宅地にある「POP COFFEES」。焙煎所を併設したお店からはやさしいコーヒーの香りが街に漂います。店内には使い込まれた木の長机と丸太のイスが並び、焙煎豆を買いに訪れるご近所の方や学生たちで賑わっています。取り扱うコーヒー豆はすべて、オーガニック＆フェアトレード。オーナーの宮房武亮さんと焙煎士の矢澤太輝さんは、開業前にアメリカ西海岸のコーヒーショップを渡り歩き、「当たり前のオーガニック」や「人びとの生活に溶け込んで地域に根付くコーヒーカルチャー」を日本でも広めたいとの思いとともに開業し、今年で20周年。生産者と消費者、そして自然が気持ちよく共存できる、そんなコンセプトがお店の雰囲気にも、香り豊かな一杯のコーヒーにも表れています。

オーナーの宮房さん（左）と焙煎士の矢澤さん

店舗情報

POP COFFEES

住所：福岡県福岡市東区美和台4-6-2　https://popcoffees.com/　営業時間：9:30～18:00、月曜定休日

▶▶▶ パレスチナサポーターキャンペーン　200名達成！ ◀◀◀

6月から8月末まで実施した「パレスチナサポーターキャンペーン」には、目標の200名を大きく上回る262名の方にご参加いただきました。心より感謝申し上げます。10月10日に停戦合意が発効しましたが、ガザの人たちの未来は依然として不安定で不透明です。そして2年にわたる戦争で破壊されつくした町、インフラ、人びとの暮らしの再建には途方もない年月がかかることが予想されます。こうした中、サポーターというかたちで継続的なご支援をいただけることは大変心強く、これからもパルシックは、皆さまの想いを力に粘り強く支援を続けていきます。

サポーターの皆さまには、パレスチナ駐在員や現地スタッフとオンラインで交流できる限定イベントなども実施しています。サポーターには、いつでもご参加できますので、ぜひ、引き続きのご関心とご協力をお願いいたします。

パレスチナサポーター募集ページ
https://www.parcic.org/palestine_gazasuppoter_2025.html

グローバルフェスタ JAPAN2025 に出店しました！

9月27日（土）・28日（日）に東京で開催された日本最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN2025」に、パルシックも出店しました。今年のテーマは「世界を変える、あなたの一歩。プラス1の国際協力」。パルシックは、連携団体である日本の緊急人道支援プラットフォーム「ジャパン・プラットフォーム（JPF）」の25周年を記念して設けられたJPFパビリオン内に出店し、民際協力活動の紹介やフェアトレード商品の販売を行いました。

パルシックブースに立ち寄ってくれた学生さんに活動紹介

東京事務所移転のお知らせ

このたびパルシックの東京事務所は、2025年12月1日付で事務所を移転することになりました。新しい事務所は、現事務所から徒歩10分ほどの近隣にあります。

2004年から20年以上にわたり、多くのボランティアやスタッフとともに手を加えながら使い続けてきた現事務所は、会員の皆さまをはじめ、たくさんの方々にお立ち寄りいただいた思い出深い場所です。建物の耐震性や設備の老朽化などの理由により、移転することとなりました。PARCとは、別々の場所に拠点を構えますが、今後も連携を図りながら、姉妹団体として活動を続けていきます。

新住所は下部の署名欄をご覧ください。

お近くにお越しの際は
ぜひお気軽に
お立ち寄りください

新事務所。
レイアウト検討中

皆さまのご支援によって支えられています

あなたの寄付でパルシックの活動を支えてください。

みなさまの温かいご寄付をお待ちしています。活動地を選んで、「今回のみ」、「毎月（サポーター）」を選んでご寄付いただけます。詳細は、パルシックの Webサイトをご覧ください。

※パルシックは認定NPO法人です。パルシックへのご寄付・サポーター費は、確定申告によって所得税、法人税、相続税などの寄付金控除を受けることができます。

寄付ページ
QR コード

民際協力ニュースは年に２回（6月・11月）にパルシックが発行するニュースレターです。送付の希望、送付先の変更、送付の停止については、office@parcic.org までご連絡ください。

- **クレジットカードでの寄付**　Webサイトよりお手続きいただけます。
- **郵便局からの寄付**　郵便振替口座：00140−8−536957　口座名義：パルシック
- **銀行からの寄付**　三井住友銀行　神田支店（普）2384136　口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。

民際協力ニュース　VOL.47
2025年11月

特定非営利活動法人 **パルシック**（認定NPO法人）
（2025年12月より）〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-6
錦町スクウェアビル7階1号室
電　話：03−3253−8990　Fax：03−6206−8906
メール：office@parcic.org
Web：https://www.parcic.org

オンラインショップ ParMarche（パルマルシェ）
https://parmarche.com
X　@parcic_office　@parcic_ft
facebook　@parcic
Instagram　@parcic_tokyo
YouTube　@ParcicChannel